

# 先週の回答



わたしは子どもの頃からかなり相撲好きだったが、今は人に語るほど好きではなくなりました。

何で好きでなくなったのかは、はっきりしている。花のある力士がいなくなったからである。相撲が好きだったのは若貴時代まで。

兄若の花は「堅忍不拔」弟貴乃花は「不撓不屈」の口上で1998年史上初の兄弟同時横綱昇進は印象に深かった。

兄は幕内優勝5回。弟は22回(うち全勝優勝4回。年間最多勝も5回)、三年連続全勝、五連覇、48連勝の記録達成の弟は、大きく兄を上回った現役戦果を残し、その点だけを見ると賢弟愚兄といえなくもない。

が、土俵後とどうかというと、兄は引

退後、年寄藤島を襲名するも、さつさと返上して、相撲協会から身を引いた。弟は貴乃花部屋の親方として後進の育成を目指しているが、現役時の活躍ほど評判はよくないようだ。

現在、取沙汰されている日馬富士暴行問題の渦中の人となっているのはご存知の通り。暴行の被害届けを警察にだしながら、相撲協会には報告をせず、協会の説明要請にも答えないという不可解な態度に終始しているのが解せない。一説によると協会の理事長になれなかった恨みが骨髄とか。

そもそも力士は、お華やお茶をやっているわけではない。相撲は格闘技である(小錦が言うように「スモウはケンカ」である)。口論になって相手を殴るのは

職務上許してやれと言いたい。横綱審議会とかが、横綱の品位とか品格とかほわわっているのは片腹痛い。さつさと相撲界から身を引いた若の花の潔さを見ると、賢弟愚兄の感がしてくる今日この頃である。

若貴時代の主役の二人(若・貴)に剽軽(ひょうきん)な巨漢の小錦、褐色の巨人曙が、猛獣のように襲いかかり、牛若丸対弁慶のような土俵上の立ち回りに手に汗握らされたのは、双方の力士(小錦・曙)にも花があつたからだと思います。

人種差別をするわけではありませんが、モンゴル出身力士が並ぶ土俵には、何となく白けるのはわたしだけかしらん。



# 今週の問題



□の中に漢字を埋めて  
四字熟語を完成させてください。